

メッセージ「あなたはどこから見てますか」

牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 12章22-32節

1月14日から大阪府に出されていた2回目の新型コロナウイルス感染症に対する緊急事態宣言が、予定されていた3月7日より早く、今日までとなるのが、一昨日発表されました。これで明日3月1日からは、晴れて緊急事態宣言が解除されるそうです。とは言え、今回の緊急事態宣言では「不要不急の外出を自粛して下さい」と言われながらも、学校も保育園も、多くの企業もお店も休業することがありませんでした。私は電車にほとんど乗らなくなりましたので、詳しいことは分かりませんが、電車に乗っている人の数も、それ程は減っていなかったのではないのでしょうか。そのように考えると、今日まで緊急事態宣言が解除されても、「具体的に何が変わるのだろうか」と疑問に感じます。しかし、営業時間を短縮することが求められていた飲食店にとっては、再び長く営業できるようになるわけですから、待ちに待った解除なのかと思います。そのようなことを考えても、やはり、自分がどこにいて、どこから眺めるかによって、同じ物事でも見え方や感じ方は大きく変わって来るのだらうと思います。

昨年からコロナ禍のために、これまでは一つの会場に集まって行われていた会議も、また研修なども、多くがインターネットを使ったオンラインミーティングとなって来ました。そのために移動時間もなくなり、また何百キロという距離の壁さえ、越えられるようになりました。この礼拝もオンライン中継をしているおかげで、この近辺の久宝寺地区の方々だけではなく、遠方の方々も一緒に礼拝に参加して下さることが、できるようになりました。しかし、そのようなプラスの側面ばかりに注目して、「コロナは大変だけど、悪いことばかりではなく、良いこともある」と言ってしまう時、そこにはやはり本当に苦しんでいる人たちのことを無視し、切り捨ててしまっているのではないかと思います。

来月で、あの東日本大震災からもう10年です。場所によってはこの10年間で風景は大きく変わり、近くに暮らしているご近所さん、コミュニティの仲間たちも、大勢が変わったのではないかと思います。この10年間は確かに、全部が全部悪いことではなかった……。とは言え、やはり「もしも、戻れるのであれば、あの地震と津波によって、全てが破壊されて、流されて、放射能に汚染される前の状態に戻りたい」というのが、あの震災で

被災した方々の、今も変わらない素直な思いなのではないでしょうか。たとえ何年経ったとしても、変わらない思いがあるということを、忘れてはいけないのだと思います。

さて、今回の聖書のお話も、そのようにどの立場に立ち、どこから眺めるか、ということ、私たちに教えてくれるお話でした。『マタイによる福音書』では、「安息日に麦の穂を摘む」「手の萎えた人を癒やす」という話が続いて、今回の「目が見えず口の利けない人の癒し」の話が続けられていますが、22節の冒頭の「その時」がそのまま安息日であったかどうかは分かりません。ただ律法を守り、律法に忠実であろうとしたファリサイ派の人たちにしてみると、「労働してはならないはずの安息日に、人を手当てするなんてとんでもない」ということで、それがイエス様が捕らえられ、殺害される原因の一つとなって行った、という一連の話の流れの中にまとめられています。

しかし、このお話自体は『マルコによる福音書』にも『ルカによる福音書』にも、異なった文脈で記されていますので、イエス様の公生涯のいつ頃にあった出来事なのかは厳密には分かりません。しかし、イエス様の死と復活の約半世紀の後に、この福音書をまとめたマタイによる編集が加えられていたとしても、イエス様によって、このような手当、癒しの業がなされていたこと、そして反対者からいちゃもん、言いがかりをつけられても、スッパリと機知に富む返答をして、反論の余地を与えなかったことなどは、歴史的事実として実際にあったことだろうと考えられています。

聖書の中には、悪霊に取りつかれた人たちが何人も登場しますが、今から約2000年前の当時は、様々な病気も障がいも、悪霊や罪や穢れのせいだと考えられていました。そしてそれらを癒し、治療するために、様々な癒し人たちがいました。福音書の中にはイエス様がたくさんの人たちを癒したと記されていますが、それは「治療し」「治した」のではなく、「手当てし」「癒した」という言葉です。現代でも病院のお医者さんとは別に、様々な「セラピスト」がいます。例えば、香りを使った「アロマセラピー」や、音楽を使った「ミュージックセラピー（音楽療法）」、対話による「サイコセラピー（心理療法）」などです。そこで使われている「セラピー」や「セラピスト」という言葉の語源となっているのが、イエス様もされた「癒し」「手当」という言葉でした。

イエス様は新しい教えを説かれた教師として有名だったというよりも、まずは癒し人として有名になったようです。そのために、行く先々で様々

な病気や障がいを持っていた人たちが、イエス様の所にたくさん連れて来られたと福音書には記されています。今回の「目が見えず口の利けない人」もそうでした。そしてイエス様が手当てされると、「ものが言え、目が見えるようになった」のだそうです。それは、具体的にどのような症状が、どのように改善したのか、回復したのかということは分かりませんが、「群衆は皆驚いた」(23)とありますから、そこには確かに周りの人々にも分かるような、何かしらの変化があったのでしょう。そして人々は、「この人がダビデの子」即ち、待ちに待っていた救い主、メシアではないかと口々に言いました。

そこで、それに対して反論したのがファリサイ派の人々でした。「自分たちは律法を正しく守っているのに、あのイエスと言う奴は、安息日の規定すら守っていない。そんな奴がメシアであるはずがない」。彼らはそのように考えていたのかもしれませんが、そして言いました「あのイエスが悪霊を追い出しているのは、その悪霊の頭^{かしら}ベルゼブルの力によっているに違いない」(24)。即ち、イスラエルの神ヤハウエの力、聖霊の力ではなく、忌むべき悪霊の力によっているのだから、メシアであるはずがない、というわけです。しかし、イエス様はハッキリと返答されました。「サタンがサタンを追い出せば、それは内輪もめだ」(26) そんなことがあるはずないだろう。

さらに、もし本当に「私がベルゼブルの力で悪霊を追い出しているのであれば、あなたがたの仲間は何の力で追い出すのか」(27)。「あなた方の仲間だって、悪霊を追い出して人々を癒しているじゃないか。それも私と同じように、ベルゼブルの力だと言うのか」。実際に悪霊を追い出して人々を癒しているあなた方の仲間の存在、実践が、あなたがたの主張が詭弁^{きべん}であるということを明らかにしているじゃないか、というわけです。

そしてまた続けられました。「私が神の霊で悪霊を追い出しているのなら、神の国はあなたがたの所に来たのだ」(28)。これは「神の国はどこか遠くにあって、いつかやって来る」ようなものではなく、「今ここで、あなた方の目の前で、この人の目が見え、口が利けるようになったこと、そこに神様の力が働いたことを、今見たでしょ。神の国はそこに、今ここに来ているんだよ」ということなのでしょう。

29 節の言葉も何だか分かりにくいですが、まず「強い人」つまり悪霊、サタンを縛り上げることなしに、その家の家財道具を取ることはできない。今、悪霊に取りつかれて振り回されている人を自由にすること、解放することはできない、ということではないかと思えます。そして「私と共にい

ない者は私に反対する者であり、私と共に集めない者は散らす者である」
(30) という言葉に続きます。一見すると、「私に反対する者」ということで、いちやもんをつけて来たファリサイ派の人たちを断罪しているかのようによに読めます。しかし、イエス様は他の箇所で、イエス様の名前を無断で語って悪霊を追い出している人たちがいるということを目にした際、弟子たちに対して「止めさせてはならない。私たちに反対でない者は、私たちの味方なのだ」(マルコ 9:40) と言われました。大事な今は、悪霊に取りつかれている人が、その悪霊から解放されることであり、その解放の業、癒しの業を邪魔しない人は皆、私と共にいる者である。だから、たとえファリサイ派の人たちであっても、悪霊を追い出す解放の業を行っている人は、私の同志であり、味方、仲間なのである、ということでした。なぜなら、そもそも「悪霊を追い出す」解放の業は、すべて聖霊の働きによるものであり、それがたとえイエス様と弟子たちによるものであれ、ファリサイ派の人たちによるものであれ、その他の癒し人、さらにはイエス様の名前を無断で語る者によるものであれ、同じ神の霊の働きであることに変わりはないからです。

私たちはつい福音書を読む際に、「ファリサイ派だから」とか「律法学者だから」と、先入観をもって読んでしまい勝ちです。確かにそれぞれの福音書をまとめた編集者の偏見や傾向も、そこには含まれています。しかし、それらを丁寧により分けながら、イエス様はどこに立ち、どこを見ておられたか、どこに目を注がれていたかを見るのが大事なのではないかと思います。

イエス様にとっては、「安息日を守らなければならない」という律法よりも、ファリサイ派であるか何派であるかという所属や肩書よりも、周りの人たちからどのように見られているかという評価よりも、目の前に連れて来られた悪霊に取りつかれた人が、悪霊から解放されることこそが、何よりも大事なことでした。このようなイエス様の歩み、生き様を振り返る時、私たち自身もまた「あなたはどこから見てますか？」と問われているように感じます。

明日から3月です。コロナ禍で迎える2回目の年度末が、どのようになるのかは分かりませんが、イエス様が常に自分の目の前の方々に対して心砕いて、接して行かれたように、私たちもまた日々の歩みの中で、イエス様と共にあって、イエス様と同じ目と心を持って、過ごして行けるように、導かれて行きます。